

2025
7



コレクション展Ⅰ「ベスト・オブ・ベスト2025」関連 こどものイベント

「美術館でとことん！タテながヨコながの世界」

■開催日時：2025年7月27日(日) 10:30～12:00

■参加者：こども9名、保護者7名

■対象：小学3年生～6年生

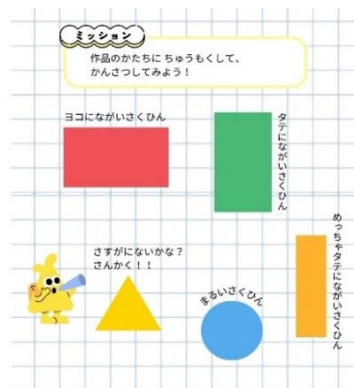
■場所：常設展示室、アトリエ2

■概要

常設展示室の作品を「絵のかたち」に注目しながら
全員で鑑賞し、その後、特製フレームキットを使った
ワークを行い、構図と表現の関係をさぐりました。

■オリエンテーション、鑑賞の導入

活動のはじめに、エドューケーターからこどもたちに、「いつも絵を見るときは
どんなところを見ていますか」と問いかけがありました。こどもたちは「色」
「かたちとか、描かれているもの」といった、普段自分たちが注目しているところ
を答えてくれました。そこで、今回はそれに加えて、絵のかたち（画面のかたち）
を見てみようとなんだな視点を提示しました。こどもたちは「長方形」「正方形」
「タテにながいもの」「丸もあるかもしれない」と、さまざまなかたちを想像しながら、
意見を出し合いました。このようにして、普段とは違った観点から鑑賞していく準備を、
楽しく進めていくことができました。



ワークシート

◇参加者の感想（※原文をそのまま紹介）

- ・こんなに楽しくて、おもしろかったから、また来たいと思いました。分かったことは、絵のどの部分を見るかによって、またがった情景が読みとれるということです。（小5）
- ・かいた人がどんなそうぞうをしていたのかが、わかったので絵をみるのが楽しかったです。これからおもしろそうな絵があったら、心の中で切りとってみたいです。（小3）

- ・絵をタテながヨコながで見るという視点が面白かった。これから絵画を鑑賞する上でも良い経験になりました。（保護者）
- ・いつもと違う鑑賞の仕方ができて面白かったです。こうすれば子どもも大人も細部までよく見られるなと感じました。（保護者）

■鑑賞活動～かたちに注目して～

鑑賞は、小磯良平記念室からスタート。こどもたちは、絵のかたちに注目しながら「しかく！」「タテなが！」「ヨコなが！」とリズム良く答えてくれました。「小磯さんは人を多く描いていて、頭から足まで描くからタテ長が多い」という発言からは、絵のかたちと描かれている内容の关系到しっかりと気づいていることがわかりました。続いて訪れた金山平三記念室は、「ヨコながの作品ばかり」とすぐに違いを発見。「金山さんは風景を描いていて、海は広いからヨコなが！」と、鋭い意見も飛び出しました。

さらに屏風作品 西山翠嶂《短夜》を前にすると、「川の上に船があるから、めっちゃよこなが！」「川の流れるがあるから」「お城があるからおほりかもしれない」と発言が続き、こどもたちは作品の細部までじっくりと観察。絵のかたちから作品テーマへと自然に考察が広がっていきました。



学芸員、エドューケーターと作品を鑑賞

■アトリエでのワーク

鑑賞の後には、アトリエに移動して、キットを使ったワークを行いました。先ほど展示室で見た作品のなかから、5作品が印刷された資料を用意。好きなものを選んでもらい、中央に窓が開いた特製のフレームを使って「画面の切り取り」に挑戦しました。例えば、小磯良平《斉唱》では少女たちの顔だけを切り取ったり、東山魁夷《夏日》では広がる畑の一部を切り取ったりと、それぞれが気になる部分に着目。フレームで切り取ることで、作品に描かれた細かな表情や背景、構図がぐっと際立って見えました。作品の一部を切り取ってみるという活動を通して、こどもたちは絵を見る視点を深め、想像力を働かせることができました。



キットを使用したワーク

■意見交換、ふりかえり

活動の最後に、こどもたちが取り組んだ5作品について、全員で意見交換を行いました。それぞれがどのように切り取ったか発表し合う中で、水平垂直だけではなく、斜めで切り取ったり、登場人物の帽子に合わせてフレームを調整したりと、こどもたちの自由な発想とこだわりが見えました。「1ミリでも違うと見え方が変わってくるよ」との西田学芸員のひと言に、こどもたちも真剣な表情を見せ、小さな違いが絵の印象や伝わり方に関わることを体感していました。

画家が作品の内容とともに"選んだ"絵のかたち。活動を通して、作品の見方がより繊細なものへと変化していく様子が見られ、楽しくも深い鑑賞の時間となりました。（小田美沙紀/エドューケーター）



西田学芸員とふりかえり

□担当学芸員からのコメント

当日を迎えるまで「タテ、タテ、ヨコ、ヨコ」とぶつぶつ言いながら、展示室を何度かウロウロしました。時には小田エドューケーターとともに「この絵は、真四角や！」などと言いながら。その時すでに、思ってもいない発見がありました。作家の「力」は、画面のすみずみまで働いているな、とも感じました。そして、当日。ええ！！！そこ？と意外な切り取りがあり、ドラマチックな切り取りがあり、ひそやかに作品の細部を伝える切り取りがありました。何度も何度も見ている《斉唱》が新鮮にみえたりして。切り取ることは、細部を注目することであり、しかし、全体をよく見ることでもあるな、と今さらながらに実感した時間でした。真剣に切り取ってくれたみなさん、ありがとう。（西田学芸員）